



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山我哲雄著『海の奇蹟 モーセ五書論集』（聖公会出版、二〇一二年）
Author(s)	古賀, 清敬
Citation	基督教學, 48, 53-57
Issue Date	2013-07-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62412
Type	other
File Information	08koga.pdf



書
評

山我哲雄著

『海の奇蹟 モーセ五書論集』
(聖公会出版、二〇一二年)

古賀清敬

ター、オルフェウス、ピュタゴラス、ホロスコープ、占星術、カバラ、魔術など——を、シンクレティズムという時代背景のもとにフィチーノやピーコなどの解釈を交えて説明する。言わば再生した神々の百科全書という趣である。

エジローグは、ピーコの甥ジャンフランチェスコの思想と活動をとおして描かれたルネサンスの終焉である。

構成も堅固、木と森のバランスも中々に見事である。

山我哲雄氏はこれまで、旧約聖書学の重要な専門的著作を数多く翻訳して紹介し、他方、聖書やキリスト教について学問的な裏づけに基づくわかりやすい解説書を出して、日本社会にキリスト教の理解を広めるのに貢献してこられた。そのような著者のこれまでの聖書学的論文の中から、モーセ五書に関するものを集めたのが本書である。

では、難解な学術論文なのかというと、そうではない。なぜなら、そこで取り上げられている課題は、ごつごつした文章や重複した類似記事など、およそ聖書を読む人ならだれでも抱くような素朴な疑問だからである。それ

ゆえに、多少の忍耐は必要だが、なるほどそうかという新しい発見や触発される叙述が豊富な論文集である。

第一章「モーセ五書の成立」では、導入の意味をふくめてモーセ五書について、四資料仮説とそれへの批判など、基本的な研究状況を簡潔に紹介している。

第二章「失楽園物語と王権批判」は、たいへん刺激的である。部族連合時代に王制をとらなかったのは、出エジプトの経験から王制への根本的批判があるためであり、王国時代になってもそれは根強くあったという歴史的背景。つぎにイザヤやエゼキエルとの王権批判の類似性を確認し、そのうえでデクストにおける王権批判とみられる表現（「善悪を知る」、「神のようになる」など）を検討している。とくにソロモン王に対する批判として妥当するとし、「命の木」や「蛇」などカナン・オリエント的な宗教的素材との共通性からも、彼の多くの異邦の妻たちが導入した可能性が高いと論証している。そのような本来王権批判の文書が最終的な編集者（ヤハウェスト）によって原初史の人間という普遍的な性質を帯び

て今日の形態にされている、とする。ただし、後代のキリスト教で「原罪」思想といわれるほどには、旧約聖書全体に影響を与えるような位置は有していない、と指摘している。評者はその主張に賛同するが、ただ、普遍的な性格を帯びたからといって、具体的なソロモン王への批判が換骨奪胎されてしまったと言い切れるのだろうかという疑問は残る。

第三章「ノアの呪い——創世記九18―27の伝承史的研究——」では、25節以下がハムではなく、その子カナンへの呪いになっているという不自然さを取り上げている。多くの研究者はカナンを個人ではなく民族と解釈して済ましているが、18―24節と25節以下との接合は不自然で二次的と判断されること、しかも18―24節は父に対する敬意という、種族伝説的テーマとは異なる家族物語であることなど、それでも解消できない疑問が残る。そして、元来の家族物語に第二段階として種族伝説的な25節、さらに第三段階として26―27節のセムとヤフェトへの言葉が加えられたとする。さらにその歴史的背景として、多くダビデ・ソロモン時代とされるが、むしろ王国

以前の「カナン土地取得のいわゆる第二段階」ではないかと論じる。ノアの三人の息子を前提とした第三段階はヤハウエストによるものであり、第二段階の民族主義的な要素を残しながらも、その枠を超えた普遍的・人類史的な意味を獲得した、とする。

第四章「アブラハムの祝福——創世記一二章１―３節の解釈をめぐって——」では、アブラハムによる諸国民への祝福の媒介の役割という普遍主義的な解釈が一般的になされているが、その場合には直前の句と著しい緊張が生じる問題があり、改めてテキスト本来の意図を再検討している。「祝福する」、「あなたによって」、「民」という用語の語義的検討から、創世記一二章は「地のすべての諸族は、あなたの名を引いて互いに祝福し合うであろう」と訳するのが適切で、一二章でヤハウエがアブラハムを祝福することと、諸族が彼にあやかつて相互に祝福を願うのとは区別されるべきであるとする。そして「通常の理解に反し、元来創世記一二章の言葉は、イスラエルを通じた諸民族への救済を告知する普遍主義的思想の表明ではなく、むしろ反対に、神に祝福された民族と

してのイスラエルの排他的な自意識を表現する極めて特殊主義的、民族主義的な色彩の濃厚な発言であったと解したい」（九六頁）と結論づけている。ここには、聖書を読む側の期待や先入観から解放されて冷静にテキスト自体に肉薄しようとする聖書学者としての面目躍如たる労苦がしめされている。山我氏はこの箇所をイスラエルが大きな位置を獲得したダビデ・ソロモン時代のヤハウエストによるものと論じているが、その場合、ヤハウエストのソロモン批判的素材や普遍主義的態度（第二、三章）との関係はどうかという問題があるように思われる。

第五章「ハガルとイシュマエル」では、創世記一六章と二二章の二つの記事を取り上げ、世俗的家族物語から民族誌的原因譚へと改造され、さらに族長物語の文脈に組み込まれることによって、子孫と土地という神の約束がいかに実現するかという神学的意味を獲得しているのではないかと、伝承史的な検討を詳細に加えている。

第六章の「アブラハムとアビメレク——創世記二〇章における罪と罰の観念——」は、副題のとおり、罪と罰について無差別的な客観主義とそれを動機や情状を考慮

して修正しようという立場とを関係軸にして、用語法的な思索が行われている。アブラハムが妻サラを妹と称したので、妻だと知らなかった自分には罪がないと訴えるアビメレクに、行為の主観的動機をも考慮すべきではないかという主張への客観主義からの移行が物語素材を用いて示されている、と著者は洞察している。著者は、アビメレクの問いへのアブラハムの苦渋の沈黙に思いやりを示しながらも、町の人々が「神を畏れないだろう」との偏見が彼にあったと指摘している。ただ、アブラハムが法的保障のない無権利の弱い立場におかれていたという、両者の力関係の差も考慮された方がよいのではないかと感じる。

第七章の「有りて有るもの——出エジプト記三十四の解釈への試論」では、まず哲学的存在論からではなく、旧約の世界の思考に即して、かつその文脈そのものから理解されるべきとする。そして、ここで語られているのは、神を「存在者」として提示しているのも「隠れたる神」でもなく、また単に「名」を示しているのでもなく、「困難な使命に当たったの神の加護と援助の約束で

ある *Bestandsformel* の一部であると理解する」(一七九頁)としている。聖書学者としての著者の学問的堅実さが結実している論考であろう。

第八章「海の奇蹟」は、始めに、ヤハウェによる勝利を賛美する「ミリアムの歌」(出一五21)が、元来どうであれエジプトに対する勝利として解釈され定着したと跡付ける。さらにこの歌が刺激剤となり、勝利にいたる具体的経過の表象を引き起こしていったと想定する。そこには、海が二つに分かれる「分水版」と海の水が一時的に後退する「後退版」という二つの表象が混在している。「後退版」では神が直接介入しているのに比べ、「分水版」は、「神の命令」↓「命令の実行」という相似的形式態が見出される。「後退版」が最古の物語として成立し、後に申命記主義的な改訂、加工を受けて「聖戦」的な物語に改造された。それとは別個の「分水版」は祭司文書に属するが、ただし「分水版」はすでにP以前に成立していた。最後に別の編集者により、それまで独立して並存していた二つの物語が辻褄を合わせることなく合体して一連の物語とされた、とする。

第九章「祭司文書における供儀と浄、不浄の体系」では、宗教学者でもある著者の見識が発揮され、複雑な祭儀規定がわかりやすく示されている。また幕屋がイスラエルの歴史状況の中で有した意義を洞察し、穢れと聖所との関係性について、放射線やダイオキシン汚染に似ているとの指摘など、興味深い。プロテスタントでは、預言書や歴史書に比して祭儀律法を軽視する傾向が強いが、その独自の意義の重要さを示してくれている。

第一〇章「祭司文書の歴史像」というテーマ自体が挑戦的である。なぜなら、祭儀は歴史状況とはあまり関係なく伝統に従って守り行われてきた性格が強いという先入観が一般的だからである。しかし祭司文書は、その祭儀の歴史的起点についてきわめて意識的に主張していることを丁寧な跡付けている。契約を軸とした分析で、片務的契約と双務的契約という区別は相対的ではないとも指摘している。

最後に、第一章では「モーセ五書の最終形態」ということで、モーセ五書全体の構成と成立にかかわる研究状況を詳しく紹介し、現形態が本来のものではなく後続

の歴史書との二次的分断の結果であることなど、現段階での著者の見解を述べている。

評者は牧師として説教にたずさわっている者でもあるが、有力な仮説を鵜呑みにし、ぎゃくに自分の読みが独自の発見であるかのような独断的な勘違いが多いことを、この論文集の豊富な研究情報と慎重で詳細な分析態度によって痛感させられた。また、幅広い人々に聖書の奥深さや現代に通じる内容を知ってもらいたいという著者の思いが「海の奇蹟」という小説的なタイトルにも表現されているように思う。